

青年海外協力隊の現地の文化及び習慣に対する関わり方の一考察

公益社団法人 青年海外協力協会

佐藤 秀樹

<要旨>

本研究は海外で協力活動を行う青年海外協力隊の体験についての定性的研究である。青年海外協力隊員（以下隊員）が海外（開発途上国）で異文化に遭遇した際に現地の人々に対してどのような関わりをしているかを明らかにすることが目的である。隊員の関わり、悩み、葛藤を分析することは異文化社会（海外）で活動をするアクターとして企業の社員と親和性が高い。

本研究において13名の隊員に対しインタビュー調査をした結果、隊員は異文化に対応するために「共通の価値観」を模索していることが確認された。また自文化中心主義と文化相対主義との狭間で試行錯誤しながら自分の価値観を再考し、相手の価値観に共感することを繰り返す過程を分析した。この考察を多文化共生社会での異文化理解・適応のあり方の一考察とする。

<キーワード>

青年海外協力隊 自文化中心主義 文化相対主義 異文化感受性発達モデル 共通の価値観

1. はじめに

多文化共生社会を目指すためには、異なる文化・価値観を持つ人々への理解と、彼らとの協働が出来る社会が望まれる。海外で活動する青年海外協力隊（以下隊員）を分析することは、その異文化理解・適応のあり方に寄与するということではないかという仮説を基に、本稿で分析する。

筆者が長年関わってきた青年海外協力隊事業は、開発途上国へ日本人（20歳～45歳）を2年間派遣し、海外での協力活動を行う事業である。目的は（1）開発途上国の経済・社会の発展、復興への寄与、（2）異文化社会における相互理解の深化と共生、（3）ボランティア経験の社会還元、の3点¹である。

隊員は、自分の「正しい」と認識している技術を伝える際に現地の文化・価値観との間で軋轢を生む。何故なら国際協力は現地の課題（貧困、衛生、環境等）を解決することであり、それは時に相手の行動変容や文化の変革を伴う場合がある。故に隊員は自分のコンテキストを中心に置き世界を判断する「自文化中心主義」（Bennett,2012）に基づき行動する場面が必然的に多くなり、現地の反発を生むことがある。その反面現地の文化を尊重し、良い悪いの価値判断を放棄する文化相対主義では「課題（の背景にある文化）に関与し改善する」隊員の目的との乖離が生じる。そのような状態をベネットは「相対性」と「倫理性（ethicality）」の調和に問題を生み出すとしている（Bennett,2017a）。現地の人々に共感しながらも、活動する過程で、現地の人々と衝突し、どのようにすれば課題を解決できるのかを真剣に考え抜くこと、つまり隊員と現地の人々のコミュニケーションを伴う協働作業によって二者択一ではない「共通の価値観」をつくっていくことが、多様な他者と理解し合うことになる。自分の価値観を押し付けるのではなく、また相手の文化を受け入れ共感するだけの存在でもなく、真剣に現地の人々に関わる存在である。ベネットも自文化中心主義の対概念として「エスノリラティビズム」（ethnorelativism, Bennett,1986）という言葉を作語した。この概念は価値判断を伴わない文化相対主義に留まらず、構成主義のパラダイムまで及んでいる（山本、石黒、Milton Bennett, 岡部、2022年）。

本研究の目的は、隊員が現地の課題や異文化に遭遇した際に、自分が正しいと思う価値観と現地の文化の価値観との乖離の中でどのような葛藤が生じ、どのような対応をしたのかを分析し、異文化感受性発達モデルを用い、ケーススタディとして報告する。

2. 先行研究

青年海外協力隊事業については、活動の成果、教育学的意義、人材育成など様々な視点から研究されている。また活動の分析において、現地の文化との統合の視点で語られる研究もある。例えば栄養士隊員の研究では、普遍的な栄養食（現地では高価）と現地の文化（食材）との統合による改善策の提言など、異文化と普遍（栄養）との関連が報告されている（石川他、2012年）。

異文化間コミュニケーションの分野においては、共同で課題の達成に取り組む場面での

理論やモデルとして、ミルトン・ベネット（M.Bennett）が「異文化感受性発達モデル（The Development Model of Intercultural Sensitivity: DMIS）」を開発した。ベネットは、文化的な違いを人々はどうか認識するか、自らの世界観の中にどう位置付けるか（異文化感受性）について6つの発達段階モデル（自文化中心主義：①違いの否定、②違いからの防衛、③違いの最小化、文化相対主義：④違いの受容、⑤違いへの適応、⑥違いとの統合）を提示した。異文化体験の質の変化をベネットは自文化中心主義から文化相対主義への移行と考えた（Bennett,2004）。

3. 調査方法

3.1 調査対象者（参加者）と調査分析方法

今回の調査は、JICA 地球ひろばという JICA（独立行政法人国際協力機構）の開発教育を実施している機関で勤務している地球案内人（全員が青年海外協力隊経験者）13 名に対し、2021 年 8 月から 2023 年 6 月にかけて、半構造化インタビューを実施した。インタビュー時間は約 1 時間程度、実施前に目的・概要等を説明した上で研究参加及び公表の了承を得た。

赴任地はカンボジア、バングラデシュ、東ティモール、マーシャル、フィジー、ケニア、ウガンダ、ザンビア、ガーナ、エチオピア、モザンビーク、の 11 か国である。対象者の年齢は 20 代後半から 40 代前半である。赴任時期は各対象者（参加者）とも 2011 年前後から 2019 年までのうちの 2 年間である。

インタビューの質問内容は「派遣国、配属先、活動内容は何か」「活動中に体験した困難はどのようなものか」「困難への対応とその結果」の 3 つである。

図表 1 調査対象者と派遣国、職種と活動内容

	派遣国	職種	派遣期間	活動内容
A	バングラデシュ	環境教育（廃棄物）	2012 年～2014 年	ダッカ北市役所廃棄物管理局でダッカ市民に向けた環境教育（ゴミ廃棄関連）の実施。
B	カンボジア	手工芸	2011 年～2013 年	コンボンチャム州にあるコンボンチャム女性開発センターで、小物（お土産用）の制作の指導。
C	東ティモール	栄養士	2015 年～2018 年	東ティモール保健省・公衆衛生局栄養課で現地の栄養士のサポート。
D	マーシャル	小学校教諭	2016 年～2018 年	所属は教育省。現場は二つの小学校で小学 1 年生～小学 2 年生を中心に、全学年（小学 1 年生～6 年生）の教師への指導及び授業の実施。
E	ケニア	環境教育（自然保護）	2015 年～2017 年	ケニアワイルドライフサービスセンター（ケニア野生生物公社）の教育部門で環境教育（野生動物保護、自然保護）の実施。

F	ウガンダ	体育	2016 年～ 2018 年	ウガンダの中等学校で、中学 1 年生と 2 年生に体育の授業を実施。
G	ザンビア	体育	2017 年～ 2019 年	ザンビアの中等学校で、中学 2 年生から高校 3 年生の生徒に体育の授業を実施。
H	ガーナ	柔道	2017 年～ 2019 年	所属はガーナの柔道協会。様々な機関（柔道クラブや刑務官養成学校等）で柔道の巡回指導の実施。
I	エチオピア	数学教育	2015 年～ 2017 年	エチオピアの政府校（日本の国立校）のアディスアベバのモデル校で、小学生（日本の小学 1 年生～中学 2 年生）へ数学の指導及び市内の学校への巡回指導。 (2015 年はバングラデシュ、テロによる治安悪化により任国変更)
J	エチオピア	服飾	2017 年～ 2019 年	アディスアベバの生産性向上センター服飾部門で教員へのサポート。
K	エチオピア	卓球	2016 年～ 2018 年	スポーツ省ナショナルチームの選手育成機関（アカデミー）で 15 歳から 17 歳の男女約 20 名へ卓球の指導。
L	モザンビーク	コミュニティ開発	2011 年～ 2013 年	識字教育の教員養成学校で、高校を卒業した 18 歳から 25 歳の生徒への識字教育の指導及び巡回指導、教材開発等。
M	モザンビーク	ソーシャルワーカー	2018 年～ 2020 年	ジェンダー社会省にあるモザンビーク障害者協会フォーラムに所属し、当事者ネットワークを作って普及・啓発活動を実施。

3.2 調査分析方法

質的研究法による分析を行う。データ分析手法については、SCAT（Steps for Coding and Theorization）によるインタビュー分析を行う。SCAT はマトリクスの中にセグメント化したデータを記述し、そのそれぞれに〈1〉データの中の着目すべき語句、〈2〉それを言いかえるためのデータ外の語句、〈3〉それを説明するための語句、〈4〉そこから浮き上がるテーマ・構造概念 の順にコードを考えていく 4 ステップコーディングと、〈4〉のテーマ・構成概念を紡いでストーリーラインを記述し、そこから理論を記述する手続きをする分析手法である。

質的研究では採取した質的データから潜在的な意味を構造的に見いだすのだが、SCAT は比較的小規模のデータ分析に適していること、データからコード化する際に明示的であることの理由により今回の小規模のインタビュー分析に適していることから SCAT を使用する。

4. 結果

SCAT でインタビュー分析し、「共通の価値観（認識）のない状態で関わった場面」「共通の価値観による受容・変容」「共通の価値観の醸成」の 3 つに分類した（図表 2 ～ 4）。

4.1 反発・拒否という現地の反応事例と要因

図表 2 共通の価値観（認識）のない状態で関わった場面
自文化中心主義（①違いの否定、②違いからの防衛、③違いの最小化）

反発・拒否	現地の課題に対しての感情または対応した結果
	【エチオピア】 数学教育 I は、同僚の教員の教育の質に問題を感じ、間違いを指摘したり、教材作成などで技術を支援したところ、同僚教師 2 名との人間関係が悪くなり、途中から目が合ってもそらされたり無視される対応をされた。 ===== 【マーシャル】 小学校教員 D は授業中に現地の教師の間違いを指摘し「お前と一緒に授業はしたくない」と言われた。 ===== 【東ティモール】 栄養士 C は、現地の伝統（言い伝え）例えば「子どもは鳥の手羽先を食べると将来仕事が出来なくなる」「妊娠中に卵を食べると災いが起こる」などの文化に対し栄養指導してもなかなか現地の人々に受け入れられなかった。 ===== 【ウガンダ】【ザンビア】 体育現地 F は体育の授業で整列をしない、教育的要素がない方法に戸惑いを感じた。体育教師 G は、ほとんど座学ばかりの体育の授業に戸惑っていた。 ===== 【ガーナ】 柔道 H は活動初期は現地の人々のゴミのボイ捨て、指導者の体罰について悩んだ。

先進国からの技術の移転は、現地の人々にはとって上から目線の「価値観の押し付け」と捉えられることがある。

エチオピア及びマーシャルに派遣された教員たちへの反発は、現地で何年も経験のある同僚の教員にとって自分よりかなり年下の隊員に指摘されたことが「誇り」を傷つけた可能性がある。

このような反発は外部の人々が外部の価値観で現地の知識・技術・方法等を批判した時に起こる。

開発途上国では、【情操教育への理解がなく、それ故実技や実験等が軽視される】ケースが多い。体育教員のウガンダ F とザンビア G が情操教育への無理解に悩んでいたが、アフリカに限らず多くの国で同様の事例が報告されている。

現地の【伝統などの文化に悩まされるケース】もある。東ティモールに派遣された栄養士 C は、現地の伝統（言い伝え）例えば「子どもは鳥の手羽先を食べると将来仕事が出来なくなる」「妊娠中に卵を食べると災いが起こる」などの文化に対し栄養指導する困難を感じた。【西洋に対する不信感】もあり、病院を信用せず、祈祷師を信用する。これらは医学的・栄養学的には受け入れられないので悩むのである。また【習慣的な行い】例え

ばポイ捨てに悩んだガーナ H など活動初期の困難を報告している。

4.2 「共通の価値観」というコンテキスト

図表 3 共通の価値観による受容、適応

文化相対主義：④違いの受容、⑤違いへの適応

受 容 1	環境を整えることによって共通の場を作り出す
	【ウガンダ】 体育教師 F は、体育の用具がなかったので、布や新聞紙でボールやグローブを作成し、共通の環境を整えた。 ===== 【エチオピア】 数学教育 I は、定規がないのでラミネートして作成したり、リトマス紙の代用で朝顔の花を使用（時々理科教育も支援）し、日本との共通の環境に近づけた。 ===== 【ガーナ】 柔道 H は「ゴミをポイ捨てすること、ケーンという棒で子供の手を叩くこと」に対して、柔道ではそういうことはしない、と言うとみんな素直に従った。 ===== 【モザンビーク】 「日本だと幼稚園児でも自分の名前を書けますが、ここでは 40 過ぎた大人でも書けないお父さんお母さんが多くいます。やっと書けるようになると、涙を流して喜んでいる人もいましたね。書ける人の前では悔しい思いもしたんだと思います。また覚えたことを子どもにも教えたいと言っていました。」と識字教育 L は語る。
受 容 2	成果により共通の価値観の達成を実感する
	【ザンビア】 体育 G は、「ルールを学ぶことは法を守ることにもつながり、互いに協力することが人としての学びになる」と普段から言い続け、首都のファーストフード店で列に並べないザンビア人の動画と、日本のファーストフード店できちんと並んでいる日本人の動画を見せ、整列の重要性を伝えた。それがその後のザンビア人の（整列する）変化を生んだ。 ===== 【カンボジア】 手工芸 B は、植物由来の染料に変えたが、カウンターパートは都市部での成功例の知識があったので、すぐ理解を得られた。一番影響があったのは、日本人会のバザーで実際に自分たちが作ったものが売れた（経済的成功）のを見たことだと語った。 ===== 【エチオピア】 数学教育 I は、相手の誇りを傷つけたことから同僚とは話さない状態が継続していたが、セミナーがあった時に、仲が悪くなった先生たちが I の授業を見に来たので、嬉しくて、彼女らの授業を見に行ったら、I が教えた方法をやっていた。「いいことはわかっているけどプライドが許さなかっただけだったんですね。それで何となくまた一緒にやろうよ、ってなりました」と語った。 ===== 【マーシャル】 同僚の教師と決裂したマーシャルの小学校教諭 D も、「時間の経過と共に一緒に授業をするようになりました。私がプライドを傷つけてしまったけど、教育の成果については理解してくれていたのかもしれない。最後は日本が体験した原爆とマーシャルが体験したビキニの水爆実験の共通の経験から、一緒に平和教育を実施しました」と語る。

受容1（環境を整えることによって共通の場を作り出す）

隊員は現地で様々な困難に遭遇する。それは現地の【**貧困故の物理的な物の不足**】やその不足に伴う現地の人々のモチベーションの低下などが典型的である。ウガンダで布や新聞紙でボールやグローブを作成し、環境を整えた体育教師 F、エチオピアで定規がないのでラミネートして作成したり、リトマス紙の代用で朝顔の花を使用したり工夫した数学教師 I などの関りは、工夫によって現地の状態を日本の状態に近づけ「共通の環境で活動する」ことへの試みである。

活動のミッション自体に共通の価値観が元来含まれている場合、例えばモザンビークのコミュニティ開発（識字教育を主とする）L は、字が書けることがより良いことという共通の認識があり、ガーナの柔道 H においては、「JUDO 柔道」という共通の価値観がある故、大きな葛藤はなかったのである。

受容2（成果により共通の価値観の達成を実感する）

首都のファーストフード店で列に並べないザンビア人の動画と、日本のファーストフード店できちんと並んでいる日本人の動画を見せ整列の重要性を伝えたことがその後の変化を生んだザンビアの体育 G、日本人会のバザーで実際に自分たちが作ったものを売ることで、共通の価値観を醸成したカンボジア B など、成果を見せたり、実感させたりすることで共通の価値観を醸成した例もある。

同僚とは話さない状態が継続していたエチオピアの数学教育 I 及び同僚の教師と決裂したマーシャルの小学校教諭 D の実感からは、関係が悪くなった教師たちも成果については理解していたと語っていた。「成果」を見せることは共通の価値観の醸成に寄与する可能性があることが報告された。

4.3 共通の価値観の醸成への試み

図表 4 共通の価値の醸成

文化相対主義 ⑥違いとの統合

統 合	違いとの統合
統合	【ウガンダ】 体育 F は、現地で女性が身分の高い男性や夫の前で膝まずくニールという習慣に遭遇し、ジェンダー的視点から受け入れることが出来なかった。しかし、現地の人々への尊敬、文化相対主義的立場からは批判もできず悩んだが、普遍的なアプローチで「ジェンダー的視点からおかしい」と批判し同質化を目指すのではなく、現地の文化を受け入れニールをするのでもなく、「日本の挨拶を紹介します」としてお辞儀をした。 また、F の体育の授業では整列をしないことに対して、管理しにくいので、一度整列させようと挑戦したが、あまり馴染まなかった。そこで現地の方法も取り入れた新たな視点（少人数のグループ分け、整列無し）でしたところ、スムーズに出来るようになった。 ===== 【エチオピア】 服飾 J は、日本的な感覚でミシンを体で覚えるように教えていた。前任者が作成した教材は活用されず、直接教えた方がよいと判断したが、エチオピアではマニュアルや文書などが評価されるので、全く評価されなかった。そこでマニュアルを含めた教材を作成し、冊子で使用すると盗難防止で活用されないことから、壁に貼ったところ、生徒が見てくれ、評価もされるようになった。 =====

ウガンダの体育 F は、ジェンダー的観点から現地で女性が男性の前で膝まずくニールという習慣を受け入れられなかったが、日本の挨拶を紹介することで対応した。これはニールを受け入れるか拒否か、の二項対立を超えた、双方を尊重しながら課題を解決する方法である。また体育の授業では整列の代わりにグループ分けをしたことも双方を尊重しながら課題を解決した。

エチオピアの服飾 J も自分の価値観を一度保留し、新たな視点（マニュアルは使用するが、冊子ではなく、壁に貼り活用した）での実施を行うことによって、現地の文化との融合をし、成果が生まれた。この事例も二項対立を超えた行いである。

5. 考察

本研究では、隊員が開発途上国で活動する際に直面した困難とその対応に関して異文化コミュニケーションの視点から分析した。

【隊員の経験した困難について】

開発途上国の物の不足、それに伴う関係者の動機付けの低さ、格差の問題、技術力の問題、人々の意識に関わる問題、その他社会的阻害要因により技術を発揮出来ない環境にあること、予算、祈祷や伝統など文化の問題、ジェンダー、時間のルーズさ、体罰、ボイ捨て

てなどの生活面の問題など多くの困難が報告された。

【隊員の困難への対応策】

物理的問題に対しては工夫して同様の環境を作ったり、共通の価値観がある場合は知識・技術を提供したりすることで対処していた。共通の価値観がない場合は反発が生じ、解決まで非常に時間がかかることがあった。例えば技術自体が低い段階にあるがそれを認めたくない場合（エチオピア、マーシャルの教員）、情操教育に対して価値を認めていない場合（ウガンダ、ザンビア）、現地の伝統や文化に強く影響されている場合（東ティモール）等である。共通の価値観がない場合、相手のプライドを傷つけ反発を受けたケースがあったが、成果に対して共通の価値観を持っていたので、解決に至った。当該分野の成果を出すことは共通の価値を生み出す鍵となる可能性があると確認された。

【隊員の心情変化】

異文化に対応している過程で「自分の正しさ」を疑う場面が多々見られた。これらは異文化の知識を知るだけではなく、自己の知識を再構成し、「共通の価値観」の醸成へとつながる心情変化であると言える。

6. おわりに

海外で活動する隊員は何らかの形で共通の価値観の共有を目指していることが確認された。またその課程で、相手への共感が生じ、自文化中心主義から文化相対主義、そして文化相対主義を超えて、さらなる共通の価値観（統合）へと変わった。つまり、相手も変わり、自分も変わる流れが生じたのである。異文化の中で活動する隊員の関りが支援者・被支援者の双方を変化させる関わりになったのである。

本稿は異文化感受性発達モデルを用い、隊員の関わりを分析したが、様々な理論を基に複雑な心情変化を分析するには至っていない。今後の課題は、より深く理論的精緻化をし、学術的に展開していくことである。

<注>

¹ 独立行政法人 国際協力機構（JICA）ウェブサイト（2023/6/1）

青年海外協力隊は、JICA 海外協力隊事業の事業の一つで 46 歳以上は海外協力隊、一定以上の技術が求められるものをシニア海外協力隊という。今回の対象者は全員青年海外協力隊の枠組みであること、JICA 海外協力隊という名称は他の形態も含むことから今回は青年海外協力隊という名称を使用する。JICA 海外協力隊には青年海外協力隊の他、日系社会青

年海外協力隊、日系社会海外協力隊、日系社会シニア海外協力隊がある。

<参考文献>

- Bennett.M.J. (1986) .A Developmental Approach to Training for Intercultural Sensitivity. *International Journal of Intercultural Relations*, 10 (2) ,179-196
- Bennett,M.J.,& Castiglioni,I. (2004) . Embodied ethnocentrism and the feeling of culture: a key to training for intercultural competence. In D.Landis,J.Bennett (Eds.) *Handbook of intercultural training* (3rd ed.,pp249-265) . Sage.
- Bennett.M.J. (2012) . Paradigmatic assumptions and a developmental approach to intercultural learning. In M. Vande Ber,R.M.Paige,& K.H.Lou (Eds.) , *Student learning abroad: What our students are learning,what they are not,and what we can do about it* (Pp90-114) Stylus
- 岡部恭宜 (2018) 『青年海外協力隊は何をもたらしたか』 ミネルヴァ書房
- 石川みどり、草間かおる、野末みほ (2012) 『青年海外協力隊栄養士の派遣携帯（新規・交替）における困難な活動内容と改善策に関する検討』 日本公衛誌 第 59 巻第 2 号 p97
- ケネス・J・ガーゲン (2004) 『あなたへの社会構成主義』 ナカニシヤ出版
- 佐藤秀樹 (2022) 『SDGs と教育開発 ”JICA 地球ひろば “ の実践から - 青年海外協力隊の経験がもたらす教育学的効果の検証 -』 国際教育 第 28 号
- 佐藤寛、藤掛洋子編著 (2011) 『開発援助と人類学』 明石書店
- 山本志都 (2014) 『文化的差異の経験の認知－異文化感受性発達モデルに基づく日本的観点からの記述－』 多文化関係学 11,67-86
- 山本志都、石黒武人、Milton Bennett、岡部大祐 (2022) 『異文化コミュニケーション・トレーニング』 三修社 pp126-128

受付日：2023 年 6 月 30 日

受理日：2023 年 11 月 24 日